

幼 兒 の 心 理 的 發 達 (一)

愛育研究所敬養部長 山下俊郎

序

幼児の心理的發達についてしばらく述べて見たいと思うのであるが、この問題を考えるに當つて二つの立場がある。その第一は、ひろく幼児一般というものを全體的につかんでその心理的特質を明らかにしようという立場であり、第二は、さらに幼児という時期の中に、年令に伴う發達を細かに考えて行こうとする立場である。こゝでは、第二の行き方をとつて、各年令毎にその發達の特質を考えて行き度いと思う。一體幼児期という時期は廣くいうと、生れてから小學校に入學するまでの時期を言うのであるが、これを年令別に分けて見ると、一歳未満の乳兒、一歳から二歳までの幼兒（一歳兒という。以下これにならう）二歳兒、三歳兒、四歳兒、五歳兒ということになり、各年令の幼兒はそれぞれに發達の特質を持つてゐる。この講話では二歳以上の幼兒に就いて一通り述

べたいと思うのであるが、順序として二歳以前の乳幼兒の心理的發達について、簡単に述べてから本論に入る事とし、また二歳以上の幼兒に就いても、四歳五歳の幼兒の所に重點を置いて述べて行きたいと思う。なお、心理的發達に色々の側面を分けて考える事が出来るのであるが、私はこゝでは運動の發達、知的發達、情緒的發達、社會的發達の四つの面に分けて述べて行く事を原則とした。たゞ二歳未満の乳幼兒の場合には、この全體を總括的に述べて行くという事にしたと思う。

一、一歳未満兒の心理的發達

1 一歳未満兒の心理的發達

満一歳までの乳兒は心理的發達に於ては丁度芽生えの時期にあるといえる。心の色々のはたらきが段々に芽を出し揃え

て来るのである。

感覺はまず一番始めに發達する心のはたらきである。味覺、きう覺、觸覺、溫度の感覺といつたような感覺は生れたての新生兒でも充分に働くようになってゐる。視覺は他の感覺に比べて一番おくれるが、生後間もなく光に感じる事が始まり、生後一ヶ月たつと凝視する事が出来るようになり、二ヶ月から三ヶ月たつと色が充分にわかるようになって、四ヶ月頃にはどの方向へも眼球が動かせるようになると共に遠い所も充分に見る事が出来るようになって来る。聽覺の發達は、視覺よりは早い、生後一週間で聞える事は聞えるようになり、二ヶ月以後になると音の方向で判断も可なり出来るようになって来るのである。このようにして感覺は生後四ヶ月頃には一通り基礎が出来るが、手の運動や觸覺と結びついて、心の發達の第一關門として完成するのはおよそ五ヶ月頃である。

感覺と同じように早くから發達するものは運動である。運動の發達は一月毎にめざましいものがあるが、殊に目立つて来るのは、三ヶ月頃からである。三ヶ月頃から子供の運動は非常に活潑になつて来る。そしてこの頃に首がすわり、五ヶ月になると眼で見たいものに手を伸ばして掴むようになり、六ヶ月で寝返りをし、七ヶ月で座るようになり、八ヶ月で這い、この様にして、生後一年にして一人で立つことが出来るようになる。

情緒生活に於て一歳未満の乳兒はその芽生えの状態にあるが、それでも、三ヶ月頃には「怒り」の最初の現われが見られ、六ヶ月頃には「恐れ」の現われを見る事が出来る。一方快に對する反應としての笑いは微笑が二ヶ月、高笑いが四ヶ月で見られ、六七ヶ月頃には手足をバタ／＼させて喜ぶというような表現が見られるようになって来る。

知的生活の基礎としての感覺の發達に就いては右に述べたが、乳兒期の最初の三ヶ月の間に知的なはたらきの基礎になるような働きがめだつて進んで来る。即ち、記憶、模倣、注意等のはたらきは生後八九ヶ月頃から非常に發達する。従つて、例えば、ニギ／＼、アバ／＼というような發音も出来るようになり、坐つた姿勢で同時に兩手に注意を配つて、ものを持つ事が出来るようになって来る。このような知的生活が芽生えて來た事は、十ヶ月頃に子供はウマ／＼というような最初の片言をいうようになる事にも見られ、また手の届かないものを紐でひつぱりよせるといふような思考力が出て來ることにもあらわに觀察されるのである。一歳未満の心理的發達はこのようにして、ようやく知的生活の萌芽を見るところまで到達するものであるといふ事が出来る。

2. 一歳兒の心理的發達

右に述べたように、子供は一歳に達すると一人で立てるようになるが、一歳三ヶ月になると今度は一人で歩けるようになって来る。そして、一歳六ヶ月頃には走ることも出来るよ

うになり、一歳八カ月頃にはつかまらないうでしきいを越えるという事も出来るようになる。そしておよそ満二歳頃までの間に歩く事が一通り自由自在に出来るようになるのが普通である。また一歳半頃には、鉛筆やクレイヨンを持つて、何かしらわけの分らないものを描きながら、いわゆるなぐり描きとかひつかき繪といわれるものを描くようになって来るが、この頃指の運動の自由が大分利いて来るようになる事は、ものを食べるのにスプーンを自分が持つて食べたり、茶わんに入った水や湯を自分で茶わんを持つて飲むようになることにも見られる。

言語生活を見るとお誕生前に最初の片言を言えるようになって子供は、一歳すぎで段々言葉を覚えて行くが、最初の半年はいわゆる一語文といわれる言葉を使う時期であつて、一語ですべての用を足すのである。すなわち「マンマ」という一語は「マンマチヨウダイ」の意味であるというように。ところで言葉の發達は一歳半から二歳までの間にまた一段と進んで来る。即ち、一歳半すぎた子供は盛にもこの名前を聞きながら、言葉をどん／＼覚えて行く。また、前の一語文という形を卒業して、「オオキイバント／＼」「マンマチヨウダイ」というように、二語以上の文章を話すようになって来るのである。このように言語生活に、子供の知的發達が見られるのであるが、このことは、さらに子供達が、この時期に繪というものを理解出来るようになる事にも現われている。繪本がこの時期には始めて繪本としての意味を持つて来るわけであ

る。

情緒生活に於て幼児達は二歳までの間に更に發達するが、乳兒の間に見られた怒り、恐れというような情緒のほかは、不満というような情緒も出て来るし、愛情、喜び、快というような細かな感情も現われて来て、次第に、情緒生活がこまやかになつて来ることをわたくし達は觀察する事が出来る。

幼児達の社會生活は、この年令までは子供同志の社會生活にはまだ見るべきものがない。大體大人との關係に見られる面にいる／＼の發達が見られるだけである。即ち、一歳三ヶ月頃には、子供達は禁止命令即ち「いけません」ということを理解するようになるが、更に一歳六ヶ月すぎると簡単な命令即ち例えば「本を持つて来て頂戴」というような事が分り、これを實行する事が出来るようになるのが普通である。

このようにして、一歳兒は自分の身體を何處へでも移動出来る自由さを獲得する所に大きな發達が見られ、言語生活の本格的な開始に伴つて知的發達も一進歩を劃し、情緒的發達にも社會的發達にも一段と進んで、次の二歳兒になつてからの精神發達の土臺を形作る段階に在るといふ事が出来る。

お記 び

前號(第四七卷第一〇號)の表紙裏廣告中「こがねのりんご」の定價が四〇圓、「ごしきのたま」の定價が四圓となつてゐますが、これはそれ／＼こがねのりんご四五圓、ごしきのたま、四〇圓の誤りにつき讀んでおわび訂正いたします。